

「男、突っ走る！」

第46回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (20)	名古屋芸術専門学校 2年生
眞榮田 浩平 (20)	名古屋芸術専門学校 2年生
長井 夏美 (20)	名古屋芸術専門学校 2年生
植野 雪奈 (20)	名古屋芸術専門学校 2年生
山口 拓海 (20)	名古屋芸術専門学校 2年生
山永 和也 (20)	名古屋芸術専門学校 2年生
安永 和也 (20)	名古屋芸術専門学校 2年生
本部 明美 (19)	名古屋カフェ調理専門学校 1年生
吉野 茉由 (26)	名古屋芸術専門学校 入学事務局員
安本 真苗 (55)	『スクエア・トラスト』代表取締役社長
桑島 百合子 (49)	『スクエア・トラスト』社員
佐伯 康太 (46)	『スクエア・トラスト』社員

室

将也がパソコンの画面を見ながら、電話で話している。パソコンの画面に

『同窓会のご案内』のハガキデザイン。

雅也「(スマホに)そうそう。データが問題なければ、ハガキ受け取って、うちのプリンターで印刷しとくけど。うん、うん……」

と、エレベーターから夏美が出てくる

と、雅也に気づき、手を振って入ってくる。

雅也「(スマホに)良いよ、またできたら連絡する。じゃあ、会場準備のほうよろしくね。いやいや、俺も本当は手伝いたいんだけど、申し訳ない。何かあったら、また連絡して。はいはい、じゃあね。(と電話を切ると)おつかれ、なつ姐さん」

夏美「おつかれ、何だか忙しそうだね。(とパソコンの画面を見て)同窓会の案内？」

雅也「そう。ほら、年明け成人式あるでしょ。

学年全体のクラス幹事の子から、LINEとか連絡先が分からない子に、往復ハガキで案内状送るから、それを作ってほしいって頼まれてね」

夏美「うっちー、幹事なの？」

雅也「うん。中学校も高校もクラス幹事なの」

夏美「相変わらずなんだね、うっちーは」

雅也「高校の時は、自分でクラス幹事やるって立候補したことは覚えてるんだけど、中学校は立候補した記憶ないんだよね」

夏美「そうなの？」

雅也「うん。どうして、いつの間に俺に決まってたのか、全然覚えてなくて。ただ、自分で立候補した覚えがないことは、確か」

夏美「まあでも、うっちーなら大丈夫って思ってたんじゃないの？ 現にこうやって、頼まれてるわけだし」

雅也「全体幹事の子もね、俺にこれを頼んできた理由がさ、『私の中でパソコンを使える同級生と言えば木内君が思い浮かんだか

ら』だって」

夏美「あながち、間違っていないんじゃないかな」

雅也「そうかなあ。あれ、そういえば、なつ姐さんどうしたの？ 珍しく401じゃなくて、こっちの部屋に来るなんて」

夏美「あ、そうそう。実はさ、ちよっとうっちーにお願いがあって」

雅也「どうしたの？ なつ姐さんが俺にお願いごとするなんて」

夏美「私のポートフォリオを見て、意見が欲しくてさ」

雅也「いやいや、俺なんかなつ姐さんのポートフォリオに意見するなんて……」

夏美「第三者としての意見がほしいの。(と鞆からファイルを出して)お願い」

雅也「当てにならないかもしれないよ、俺の意見なんて」

と、夏美のポートフォリオを見始める。

夏美「聞いた？ 一年生、明後日から海外研

修でアメリカだって」

雅也「早いね。もうあれから一年経っちゃったんだ」

夏美「楽しかったよね。特に、夜みんなが集まった時は」

雅也「醤油貸してほしいとか、砂糖持ってきてたとか、自炊した料理持ち寄ったりしてね。まるで、昔の近所付き合いみたいな感じですよ」

夏美「私なんて、風呂上がりに髪拭かずに戻ってきてって言われたときは、びっくりしたよ」

雅也「この間、みずちゃんともそういう話してたわ。覚えてる？ 枕投げで、なつ姐さんがブチ切れたこと」

夏美「私、ブチ切れたっけ？」

雅也「二階で眠ってるなつ姐さんに向かってさ、俺とおっくーとぐつちと眞榮田とあつぽんが一斉に枕投げたじゃん。それで、なつ姐さん、封印された魔王が蘇ったみたい

に起き上がって、『誰だ？』って俺たちに  
がん飛ばしたじゃん」

夏美「ああ、あったわ。一人一人に枕で思い  
つきり叩いたっけ？ 私からのお仕置きだ  
って」

雅也「そうそう。動画撮ってるみずちゃん  
が、腹抱えて笑ってたもん」

夏美「面白い構図に見えたんだろうね」

雅也「まあ、楽しかったもんね。（とポート  
フォリオを見ながら）ねえ、この下の説明  
文のところだけどさ、句読点のマルが付い  
てるページとついてないページがあるでし  
よ」

夏美「あ、本当だ」

雅也「あと、凄く細かいところになるんだけ  
ど、句読点のテンの後って、変なスペース  
ができちゃってるじゃん。これはフォント  
の都合でどうしようもないから、編集で文  
字の間を詰めたほうが良いかも」

夏美「なるほどねえ」

雅也「こんなことしか言えないわ。作品のこととか、デザインのことなんて、偉そうに言えないもん。普段文字ばかり書いてる俺からしたら」

夏美「大丈夫だって。でも、やっぱりうちーだね。私と見てる視点が全然違うわ」

雅也「俺はデッサンもCGの授業も受けてないから、作品そのものことはよく分からないしね。センスのかけらもないから、やっぱりデッサンをちゃんと受けて、ビジュアルイメージが浮かんでる人とは違うんだよ」

夏美「でも、説明文一つでも大事だもんね。文字の隙間とか、テンとかマルなんて気にしたこともなかった。他の子も、うちーにポートフォリオの文章のところ、見てもらえたら絶対良くなると思うけど。私たち友人たちの中で、うちーだけが唯一文章の専門家なんだから」

雅也「俺で良ければ、いつでも赤ペン先生や

るよ」

夏美「やった、ありがとう」

と、浩平が入ってくる。

浩平「あれ、珍しい組み合わせじゃん」

夏美「うっちーに、ポートフォリオ見てもらったの。文章のところ、細かく見てくれたよ」

雅也「そんなことないって」

浩平「確かに、うっちーは文章の専門家だから、心強いよな」

雅也「よしてよ、プレッシャーになっちゃうじゃないの」

夏美「（浩平に）あ、加藤から聞いたけど、今年の卒業進級制作展の実行委員会、加藤と眞榮田もやるんだって？」

浩平「ああ」

雅也「え、そうなの？」

浩平「うっちーも、やるんだろ」

雅也「うん。去年は、いろいろ大変だったから、一度は実行委員会なんてやらないって

思ってたんだけど、やっぱりリベンジってわけじゃないけど、今年もやろうかなと思っ  
ってね」

浩平「俺は、実行委員会の空気を換えてやろうと思っ  
て」

雅也「また思い切ったこと言うんだから」

浩平「うちーから去年の話を聞いて、このままだとダメだなと思っ  
てあと、実行委員会に入れば全体のことも分かるだろ。その情報だ  
って、うちの専攻にスムーズに伝えれば、準備でのトラブルだ  
って回避できるわけだし」

夏美「確かに、そういう人が間にいてくれたら、私は心強い  
かも」

浩平「だろ」

夏美「頼りにしてます。（と雅也に）意見ありが  
とう。早速直してくるわ（と出ていく）」

浩平「なあ、今度企業プロジェクトで、うちーの地元に行くんだよ」

雅也「え、そうなの？」

浩平「こっちの用事が終わったら、せっかくだし、遊ばないか？」

雅也「（笑顔になって）うん、遊ぼう」

浩平「よし、決まりだ」

雅也「OK！」

2 同・同・403教室

拓海がパソコンでロゴマークを作っている——書類を持った和也が入ってくる。

和也「ぐっち。これ、ゲームの仕様書。変更点、赤字に直してある」

拓海「（書類を受け取り）ありがとう。後で確認しとく」

和也「（パソコンの画面を見て）何かのロゴでも作ってるの？」

拓海「本の表紙に使うタイトルロゴ。うっちーが、自分の作品集を制作展に出すんだけど、そのタイトルロゴを作ってほしいって

頼まれてね」

和也「へえ、うちー今年は、とうとう自分の本出すんだ」

拓海「木内先生の作品集だから、ちゃんとやんなきゃなと思ってさ」

和也「俺も、あつぼんたちとのゲーム制作、ちゃんと形にしないと。あれだけのメンバーが揃ってるんだし」

拓海「まあ俺も携わっている以上、ちゃんとしたキャラクターデザイン作らないとな」

和也「ぐっちって、今年も制作展の実行委員会やる？」

拓海「やるよ。もう教務に行って、希望者名簿に名前書いてきた」

和也「はやッ。他に誰か、書いてた？」

拓海「じっくりは見えてないけど、うちーと、眞榮田と加藤の名前は見たよ」

和也「映像科が実行委員会に入るなんて珍しいな」

拓海「だよな。例年、映像科は自分の作品で

手一杯で、なかなか実行委員会に入ることなんてないのに」

和也「やっぱり、俺たちの学年は珍しい代なんだろうな」

拓海「まあ、それが良いところでもあるんだから。現にゲーム制作も、うちの作品集制作も、専攻を越えたコラボでできてるんだから。それぞれの専門スキルを出しあえるのも、珍しい学年だからこそなんだよ」

和也「それもそうだ」

拓海「作品作りも、実行委員会も頑張りますか」

和也「そうだな」

拓海「仕様書の変更、また見とくわ。何かあったら、また連絡する」

和也「ありがとう、よろしく」

と、出ていく——作業を進めていく拓海。

雅也、安本、桑島、佐伯が編集会議を  
している。

N 「それから間もなく、『スクエア・トラス  
ト』でのアルバイトが始まりました。安本  
社長の元で、事務作業をしたり、他の社員  
の人と一緒に編集会議に参加し、掲載内容  
を検討する意見も述べさせていたいただいたり  
……」

4 喫茶店

雅也が、フリーペーパーの配達にやつ  
てくる――マスターに、フリーペーパ  
ーの束を渡す。

N 「設置店舗への配達も行うようになりまし  
た」

5 理容店

雅也が、店主と談笑している。

N 「中には、配置店舗先の方と顔なじみにな  
って、談笑したり掲載内容の要望なども聞  
いた」

くようになりました」

6 駅・ロータリー

浩平が待っている——雅也の運転する  
軽自動車がやってきて、運転席から雅  
也が降りてくる。

雅也「おまたせ」

浩平「うちーの運転って、レアだな」

雅也「そりゃ、学校じゃ運転することなんて  
ないもんね」

浩平「この辺、遊べるところあるかな？」

雅也「ちゃんと、ピックアップしてある」

浩平「さすが」

雅也「行こッ」

浩平「おお」

車に乗り込む雅也と浩平。

7 ボウリング場

雅也と浩平がボウリングをしている——  
——ストライクを出す浩平。

浩平「よっしゃー」

雅也「すげえ」

と、ハイタッチをする。

雅也「さて、俺も頑張るか」

と、ボールを投げる——右端に転がり、  
そのままガーターとなる。

浩平「ああ」

雅也「久しぶりすぎて、ダメだな」

8

ハンバーガー屋

雅也と浩平が、ハンバーガーを食べながら談笑している。

浩平「たまには、こういう息抜きもないとな」

雅也「久しぶりに、こんなに遊んだかも」

浩平「うちーは、学校に住み着いてるものな」

雅也「住み着いてるって、そんな座敷わらしじゃないんだから。でもまあ、月曜から土曜まで授業あるし、日曜日はオープンキャンパスのスタッフに入る時もあるからね。」

言われてみれば、何だかんだやることも多いし、まあある意味では住み着いてるんだろうね。作りたい作品もたくさんあるし、何よりやっぱり学校が好きだからできるんだよ。嫌いじゃなかったら、住みつけないでしょ。そりゃ、入学してすぐの頃は、学校や通学の環境に慣れなくて、高校に戻りたいっていうホームシックはあったけど」

浩平「それだけの気持ちがあれば十分だよ。やっぱり、キラキラしてなきゃ、うちーは」

雅也「眞榮田だって、いろいろ作品作ってるじゃん。バイトだってあるだろうけど、それでも大体学校にいる同じ顔ぶれの中で、みんな時間をかけて作品作ってるじゃん」

浩平「確かに、常に誰かしらいるもんな。むしろ、いるのが当たり前みたいに」

雅也「この間、確か日曜日だったかな。オーブンキャンパスのスタッフのシフトが入ってなかったら、家にいたの。そしたら、ぐ

つちから『今どこにいる？』ってLINE  
が来たんだよ。『休みだから家にいるよ』  
って返信したら、『何で学校にいないんだ  
よ』って突っ込まれちゃって」

浩平「まあ、うちーは四階か五階のどこか  
しらにいるって思うもんな」

雅也「これからも、住み続けますか、学校に」  
浩平「良いと思う」

笑い合う雅也と浩平。

9 名古屋芸術専門学校・4階・廊下（数

日後）

雅也が昼食を食べている——エレベ—  
ターが開いて、雪奈が入ってくる。

雅也「（驚いて）ゆきちゃん」

雪奈「おつかれさま」

雅也「何か、久しぶりにゆきちゃん見た気が  
する」

雪奈「学校には来て、授業も向けてただけ  
ど、自習する時間が上手く取れなくて、な

かなか四階にも来れなかったの。でも、も

うその心配もなくなったから」

雅也「心配って、何かあったの？」

雪奈「実は……彼氏の束縛は酷くてね」

雅也「え……？」

雪奈「自由な時間も作れなくて、男友達とも

連絡取るなって言われたの」

雅也「だから全然返信なかったんだ」

雪奈「まあ、その彼氏はこっちから振ってや

った。おかげで自由の身になれた」

雅也「そっか」

雪奈「男運ないって持ってるんでしょ」

雅也「いや……」

雪奈「良いよ、本当のことだもん。一年前だ

って、うちーにはどれだけ迷惑かけたか」

雅也「……」

雪奈「遅れた分、取り戻さなきゃね。じゃ」

と、403教室に入っていく——心配

そうに見ている雅也。

10 栄の街

イルミネーションやクリスマスの装飾がされている。

11 名古屋芸術専門学校・1階・表

雅也、明美たち学生スタッフが、オー  
プンキャンパスの高校生の対応をして  
いる——と、トナカイの被り物を持つ  
た吉野がやってくる。

吉野「木内君、これ被って」

雅也「去年はサンタの仮装でしたけど、今年  
はトナカイですか（と喜んでトナカイを被  
る）」

明美「先輩、似合ってますよ」

雅也「そう？ 今日にはクリスマスイベントも  
あるんだし、これぐらい体張らないとね」

明美「それでこそ先輩ですよ」

雅也「明美ちゃんも、何か被れば良いのに」

明美「私はそういうの大丈夫なんで」

雅也「何でだよ」

明美「私が被っても、先輩みたいに面白くは  
なりませんから」

雅也「これは、面白いの部類に入るの？」

明美「面白いっていう自覚がないんですか、

先輩には？」

雅也「ないねえ」

明美「相当面白いですよ」

吉野「学校のSNSにアップするわ」

雅也「マジですか？」

吉野「撮るよ。はい、チーズ」

と、スマホで撮影する――満面の笑み  
でピースして写真に映る雅也。

吉野「良い感じに撮れた」

雅也「本当ですか？ 僕、歩くフリー素材な  
んで、いくらでも使ってもらって良いです  
よ」

明美「何ですか、歩くフリー素材って？」

雅也「著作権も肖像権もないってこと」

明美「先輩無いですか？」

雅也「無いに等しいね。みんな、自由に俺を

使ってる」

吉野「早速アップした」

雅也「早いですね」

と、高校生が入ってくる。

雅也「こんにちは。体験入学ですね。では、こちらで受付します。どうぞ」

その様子を見て微笑む明美と吉野——  
トナカイの被り物をしながら、対応している雅也。

N「様々なことに追われながら、二年生のクリスマスと年末は、あつという間に過ぎ、二〇一五年という一年は、終わりを迎えたのでした」

つづく